



第 4 号

2001年3月

目黒稲門会

発行人: 眞仁田勉 事務局長: 樋口定廣 編集人: 岩崎正夫  
〒152-0003 目黒区碑文谷3-4-17  
TEL: 03-3723-2637, FAX: 03-3723-9720

# 目黒稲門会会報

## 2001年新年懇親会、開催。佐山氏の講演に感動。

新年懇親会は1月14日（日）午後5時からウエスティンホテル東京で開催された。

第一部は講演会で、浅海幹事長の司会で進められた。まず眞仁田会長が新年の挨拶の後、当日の講演は、ノンフィクション作家佐山和夫氏。アメリカプロ野球初の日本人プレーヤー・ジャップミカドが、早稲田野球部出身の三神吾朗氏であったことをつきとめるまでの波瀾万丈の物語であり、この三神吾朗氏を仲立ちする不思議な巡り合いが、目黒稲門会員の桑野祐光・八幡和三郎両氏の間であったことを紹介された。八幡氏による佐山氏の経歴紹介の後ただちに講演に入ったが、佐山氏の熱のこもった講演（裏面に掲載）終了後、感動の覚めやらぬ中、三神氏次女順子さんの夫である会員の桑野氏から、三神吾朗氏の二人の息

女を始めとする縁戚の方の紹介があった。なかでも元東京女子医大附属病院長で現役の医師、96歳の三神美和さんのカクシャクたる立ち姿には、期せずして大ききなどよめきと盛大な拍手が起き会場を盛り上げた。第一部閉会の挨拶を述べた土川幹事長は、たまたま三神吾朗氏の母校甲府中学（現甲府一高）の後輩にあたり、和歌山県から遠路講演に上京された佐山氏に賛辞と謝辞を述べ、盛大な拍手のなか第一部を終了した。

第二部の懇親会は海沼副会長の総合司会で、鈴木副会長の挨拶に続き、元東映フライヤーズの名二塁手として活躍した松岡幹事から、稲門倶楽部（野球OB会）の会長大道信敏氏が紹介された。大道氏は、自分こそ佐山氏に次ぐ三神氏の認識者であると述べ、三神氏の遺族から寄託されているユ

ニホームは、野球部創立100年を機に野球部の安倍寮記念室に展示したいと挨拶された。

引き続き横山副会長の乾杯の音頭で会食に入り、場内各所に懇親の輪が広がった。今回は家族同伴のパーティーであり、20名を越す女性が参加されたが、円卓を囲んだ楽しい語り合いが続き、予定を半時ほどオーバーしたほどであった。

閉会にあたり、中沢副会長は出席者に御礼を述べ閉会を告げ、最後に小林一光氏の発声で「都の西北」を声高らかに歌い、なごやかな雰囲気の中に閉会した。

なお記念として、大竹幹事が苦心して作り上げた会員地図が配られた。これは会員の顔写真が目黒地区図のなかの居住地に表示されているという優れたもので、今後の一層の親睦に役立つと期待されている。

熱のこもった佐山氏の講演



# 「アメリカプロ野球 初の日本人プレーヤー・三神吾朗を追う」－佐山和夫氏の講演から

昭和33年・商学部卒 八幡和三郎

2001年の日黒稲門会新年懇親会の催しは、ノンフィクション作家佐山和夫氏を迎えての講演会でした。

佐山和夫氏は、昭和11年生まれ、慶応義塾大学文学部英文科卒、スポーツ分野ノンフィクションの第一人者で、特にアメリカ野球への造詣の深い方です。著作は数多く列挙し切れませんが、「ベースボールと日本野球（中公新書）」や「ジャップ・ミカドの謎（文芸春秋社）」などが特に有名で、数多くの人に読まれています。皆様もぜひご一読ください。今回の講演は、この著書「ジャップ・ミカドの謎」の主題で、アメリカプロ野球初の日本人プレーヤーは誰かを調査し、遂にはその人が早稲田大学野球部の先輩で第2回アメリカ遠征チームのメンバーでもあった三神吾朗さん（明治41年入部）であることを突き止めるまでの、興味溢れるお話でした。

以下、佐山和夫氏の講演内容を、ご著書の「ジャップ・ミカド」の謎の記述で補い、三神吾朗さんのロマンに満ちた人生に迫ってみたいと思います。

今から十数年まえ、ニグロリーグの歴史を調べるため、アメリカを取材旅行していた佐山氏は、古い一枚の写真を見て仰天します。その写真は今から90年近く前の1913年のもので、当時の強豪チーム「オール・ネイションズ」のメンバーが写っていましたが、そのなかに日本人と思われる選手がいるのです。アメリカ野球を研究している佐山氏は、以前にも「オール・ネイションズ」のメンバーに、ジャップ・ミカドという日本人がいたらしいことは聞いていました。しかし、さし当たっての関心事の調査に追われていたため、そのままになっていたのですが、この写真を見た日を境に、この人が誰であるかの探索にのめり込んでしまったのです。

まず「オール・ネイションズ」というチームです。このチームのオーナー兼監督はJ・L・ウイルキンソンという白人でした。特注した寝台車に、多くの人種の選手で構成するチームを乗せてアメリカ中をまわり、各地の強豪チームと試合をしていたのです。

佐山氏が見た写真がのっているコピーには、次のように紹介されていました。<このチームにはキューバ人、インディアン、日本人、白人、黒人などが混在していたが、アメリカ・スポーツの歴史のなかで、これほどの多民族からなる長期のチームを編成して成功したのは、これが最初であった。……>そして二人のキューバ人、三人の白人、二人の黒人などがならばメンバーのなかには、ミシガン大学卒の日本人と紹介されているジャップ・ミカドの名前があったのです。

「オール・ネイションズ」は、単なる「どさまわり」のチームではありませんでした。三人の白人選手は後に大リーグに上がり、ニューヨーク・ヤンキースやシカゴ・ホワイトソックスなどの選手になっていますし、投手陣の双璧黒人投手のジョン・ドナルドソンとキューバ出身のホセ・メンデスは、大リーグを含むレベルでも一流にランクされる投手だったのです。

1994年の秋、佐山氏はシカゴでジャップ・ミカドに関する資料を探していました。「オール・ネイションズ」はシカゴを中心に巡業していたからです。図書館を訪ね、当時の新聞から関係記事を調査していた佐山氏は、インディアナポリスの図書館でジャップ・ミカドについて述べている新聞記事に初めてめぐり合います。それは1914年6月5日の「オマハ・ワールド・ヘラルド」の「オール・ネイションズ」の紹介記事のなかにあり、<……シカゴ大学出の日本人外野手ミカマ（Mikama）が、今週から「オール・ネイションズ」に加わるだろう>と書いてあったのです。またカンザス州キングマンの新聞「ザ・リーダー・クーリア」には<……メンバーには、肌の色があまりにも黒いために大リーグには入れないキューバ人選手ホセ・メンデスのほか、イリノイ州ゲイルズバーグにあるノックス・カレッジでキャプテンをしていた日本人選手ナイト・マカミ（Naito Makami）……>という紹介記事があったのです。

佐山氏はその後も調査を進め、各地の新聞でジャップ・ミカドについての記事を見つけだします。しかし、その名前はミカド、ミカマ、マカミ、マクム、マック、カミ、マッカミ、マコミなどと書かれていて、出身校もミシガン大学、シカゴ大学、ノックス・カレッジと多種多様でした。

佐山氏はこの時の心境を、著書のなかで「私は迷路に迷い込んでいた。途方に暮れていたといっているのだろう。ジャップ・ミカドの正式の名前も、経歴も、何も分からないのだから」と書いておられます。

その後の調査で、ジャップ・ミカドはアメリカに遠征した日本の大学チームのメンバーだったらしいことが分かりましたが、これも決め手に

はなりません。まさにジャップ・ミカドの謎は、謎のまま消え去らねばならない運命にあるのかと思えました。

ところが佐山氏の友人、Y氏からの「ジャップ・ミカドというのは、早稲田大学の選手だった三神吾朗さんではないでしょうか」という電話で、一気に謎がとけてきます。前後してMikami（ミカミ）という名前が記載されている新聞も見つかりました。それは「ライアン・リポーター」紙の記事で「二回オール・ネイションズは、ドナルドソンが二塁打で出塁。ダンバーの犠打で三塁へ進んだ。そこで日本人選手ミカミ（Mikami, the Jap）が投手返しの猛烈な一撃。ドナルドソンが生還した。……>と書いてありました。そこには間違いなくミカミの名前があったのです。

ジャップという呼び方は、一般に日本人に対する蔑称といわれています。しかし佐山氏によれば、必ずしも蔑称だけではなく、普通の日本人をあらわす意味もあったそうです。特に新聞の見出しなどで、日本人を表すとき「Japanese」では長すぎるので、「Jap」と省略されたのがその例になります。

三神吾朗さんがジャップ・ミカドであると確信した佐山氏は、次なるステップに入ります。この時の心境を「彼の早稲田でのプレーぶり、ノックス・カレッジでの様子など、調べれば徐々に分かってくるだろう。それより問題は、彼の家族の方々が、一体、どこにおられるからだ。もしもご家族のどなたかにあうことができれば、「ミカドの謎」も本質的に解けるだろう。「オール・ネイションズ」に入団したいきさつなど、聞かせてもらえるかもしれない。その後、彼がどうされたかもぜひ知りたいところだ」と書いておられます。

三神吾朗さんの経歴や家族の状況は、ノックス・カレッジの同窓会記録にありました。

<三神吾朗、1889年（明治22年）生まれ 山梨県甲府市出身。1912年早稲田大学卒業。1916年から17年までイリノイ大学に在籍 修士の学位取得。1921年東京にて結婚 妻の名はMiyoko。子供はAtukoとJunkoの二人。三井物産に勤務 部長。のちにコトブキ・シーティング・カンパニー取締役。1958年死去。自宅は東京都日黒自由が丘。>がそれです。

時を経ずして佐山氏は当時93歳の美代子夫人に会うために自由が丘の三神家を訪問します。三神吾朗さんがジャップ・ミカドであることを確認するのが目的でした。しかし美代子夫人の話は期待通りにはいきませんでした。夫人は「早稲田で野球をやっていました。ノックス・カレッジでもキャプテンをしていたと聞いています。しかし日本にプロ野球ができた時も『プロなんて、あんなもの』と書いていましたから、アメリカでそれに携わっていたことはないと思います」とあっさり否定されてしまったのです。

期待は外れましたが、状況証拠からみて三神さんこそがジャップ・ミカドに違いないと思う佐山氏は、その後も調査を続けます。そして三神家は大地主で、錚々たる人物が輩出している地方の名家であることが分かってきます。また、当時の学生選手が夏休みに、プロ野球でプレーしている多くの例があることを知り確信を深めますが、三神さんがプロでプレーした決め手がありませんでした。

しかし、美代子夫人の写真を撮るために三神家を再訪した佐山氏は、遂に決定的な証拠に出会います。それは、夫人が「こんなものがあるのを思い出してね……」と出してくださった古い紙袋の書簡類のなかにありました。イリノイ大学の卒業証書、ノックス・カレッジのベナントなどと一緒に保存されていたものです。佐山氏は一通の絵葉書を見て、ギクリとしました。なんとその絵葉書の宛名は、「ミネソタ州スレイトン 三神吾朗様」で、そのあとに「オール・ネイションズ野球団気付（care of All Nations Ball Club）」と明記してあったのです。同じ宛名の手紙は他にも二通ありました。ながい探索のあと佐山氏は、遂にジャップ・ミカドが三神吾朗さんである証拠に辿りついたのです。

（あとがき）

会場には長女の淳子さん、次女の順子さんを始めご親戚の方が出席されましたが、特に姪にあたる三神美和さん（元東京女子医大附属病院長。96歳で現役の医師）が、「小学生の頃、吾朗叔父さんから海外遠征のお土産に赤いリボンを買ったのは、忘れられない思い出です」と語ると、会場からは期せずして感謝のどよめきと拍手が湧き上がりました。

エンディングには、三神さんがノックスで愛唱していた「ティペラリー」のメロディーが流れ、感動とロマン溢れる講演会は終わりました。最後に、佐山先生本当に有り難うございました。和歌山県の田辺市からわざわざお出かけ頂き、心より御礼申し上げます。